詞の玉の緒

五

ホ 2
143
5

詞瓊綸五之巻

こそ

○こその結びは。紐鏡の右行の隠し結辞なり。一の表に出せる三転証歌の
ごとし。されてこその結びとなる辞は。上よりつゞきて切るゝをおほくは作（おホ）
きる辞（いはゆる下知の詞なり）なる故。つゞきとかくまで作きる辞となるなれど。思へ ゆけ などいふ たぐひ。上よりこそなき
こさきハ作きる辞なるまでそこといへども作きることにあるなれ。又上よりこそなくて。語の続く所にかゝるをみる
かゝるなれども。この二つ結辞へ続くべし。○よられども あしきまでも。よるまでも あしけれ
笑ふらど。又思ハ見ど ゆる見ど などのたぐひ。いづれも見ゆ。又いひしらぞ 笑ひしらぞ いひしらど
こその結び辞の。餘ハ是に准へて考へ試むべし。此格のたがふハなきもなし。さるてにをは結
定まりの格なること かくのごとし。又今の世結俗語のてにをはそれも。こその結びぞう
ちは。皆おのづから雅語の格と異なることなし。こゝも又おのづから結格なし。

門 号 巻 利2 水 149 介
同攻會印

○詞なくてこそと結ぶ格
新十五 人ならばおもふこゝろをいひてましよしやさこそハしづ川のながれ
新勅十八 まよひこし美路の雲路出なましかいろこそよそのなごめの程
六帖 あし引の山したしげみいへどかくてまたなよしやこそ紅葉のゆゑ
新後十五 宗尊 かくてこそおなじ大井の萩の露うつろふ色をいかでひもなし
大和物語 こよひこそなごり酒にあるなきておきてかへるとき八千代ぞや
源氏 若菜上 なきこそ八重なる夜の「はし人のゆくへ八しるや世にはまし」
○いひきりてこそ結ぶ格
今七 こひしなでかへるつらしにかまでをしれむすぼバこそいきのまよ
新六 うれしさもさけばむかしを忍ぶよりこそかくてもやまの川のみづ
後十七 なにそづをしふこそみ川の浦でふこまやかのよ衣うつらむ
後拾十二 あふことをやよ身こそ人めをそらすかくれどもあらき浪の
今七 迷ひきとたのむまバこそかかをおもひてやいらずとうつるなき
新六 雨よそみちよこそちかくあるとおもふさがし月のあやまらん
○こそととぢむる格
古十四 はの雲をしてもおもはえ山しろのとはちえんとそのこそ
後十一 何しるも結ひ(?)むたハ人めるさきのこゝろをうへのこそ
玉七 拾遺 あづさし紀の国ふの家居に居がまきそぞ代の八千世にかくしこそ
大和物語 かきくぎの七くさせる格乃若のうへをよそにみるものこそ
もべてこそとちぢむるハ玉緒「ひのうへて」下へそのことをうつくしめる心〇凡雅
十七又拾玉「河へそうし」ありまかのことぞまたぬを思ひもいまだぬよりかうへこそみそ又
○玉緒を五

百夜花も見し人さへもちらぬ家の戸をさすにまたるゝこそ□。こもりてえそのそびらなりけり

万十一 せざくる いきの緒におもひし人のおもひこそ□吹風にゆくバかなしくあるべきなれ

かくるなどにて切るゝは見づらし

○こそ二つある事

後拾十 涼さこそ夏はころもをまさるらめ□なほざりは思ひわたるに[こそ]まさるえ

万六 ともあ 此山乃つきせぬことこの川のたえずのことこそさくやむ時もあらめ□

此万葉の歌はこそを二つかさねて一つの結をするとみえたり□

○あそそ

古十四 石見ゆくあはれしらなをたてゝこそかくこそをえめいつなれも有なれ□

旧十七 大ちゝやましかれど年もこそ□を神代のこともおもひいづらめ

かくのごとく下へつゞけるをてにをはとつふれたり。そはまたへし

○かこそ□

かこそハかまをかしきもかりていやぶしきの辞也。つよのことと言ふ心なり。ぞとりぞよのまぎれのなし。三の巻ぞの結のかぞの条とかむがへあはせをなし

古二 花見ればこゝろさへにぞうつりけるなるはいでじかとかこそ言ひ□

日四 こよひあむ人はあそびたまぐさは名し紀伊まちかこそまた□

後十三 別るゝ人はかなさじなかれ川をもうらバ浅き瀬かこそハ見え□

拾十六 おもふことはいふでぞあるまちかすと山路もちかしかこそきけ□

千三 五月雨しぬきしるんいやめ草沼乃岩うきさなきかこそこせ□

新六 みなとちるかくれ江にみかふるなりいなるまじ紀かこそとそ□

旧十八 かくばかり紀をきのびくながらへむこよりまさるものかこそ見へ□

又はドてとみだれ何やらむとむすべるハ

後九　人のうへ乃ことゝしいはゞしらぬ身も思ひやるもこそあれ

拾一　身にかへてあやなく花を惜むかないけらば後の春もこそあれ

新二　山ざくらちるをよりはかなさもがな花ちらぬやと人もこそとへ

後拾十一　思ひあまる人もこそあれあぢきなくつれなき恋に身をやかへてん

又たゞ常はこその上にもじの添るハ

古十三　うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるがわびしさ

拾二　まうけてきかんとこそ思ひしか山ほとゝぎすおそくなくらん

旧十二　あふごなみむすべるをこそ人もゆきあかぬ時のまもえしばこひしき

六帖　月夜にはこぬ人をこそまつときけかへるさもとかへを物ぞおもはざりける

大和物語　かくばかりもゆる思ひをこそわびめいかなるかぜのふくにつけてもかへるべき

山家集　何となくあはれとおもふ人もがなすむ所いかにぞひとりこそせめ

これらハ結末をおしてかうざまにわる(?)上なるもこそとハ異也。此格を大かたハせよかくるね物なり。右ふ云の山家集結句も結古ならハ。思ひこそハせめと云へしてへらまくり去年日記の詞にまさこそ二つ何でもしるも此格のもこそ

○ちらもこそ　是ハちるもとこそとまがりける物にして。もこその上に又ちのつゞけるにハ何ぞ。

まとハ異也。ちるぞの格と同じ。三のちるぞの格のちるぞの條と考へ合すべし　さてちるもとつぶよ指く

都ての言をふくぞうりされでこその下へかゝりてとゝのふ言を加へ

て見まれば。分けれも明かなる也。

後十　なえてだになぐさむやとぞ思ひしになどりこそ恋しかりけれ

拾十三　よすがらんかハとりじと思ひて出る東ちるこそ美しかりけれ

千三 ほとゝぎす又なやあくとまたれつゝきくよしもこそ袮られざりけれ

続拾十五 あかつきへく又ゆくまでの命の程よおもし哉しもこそくやしかりけれ

玉十 なの名し残す川よの面はむ方にきやむしもこそ流るゝ中の身なれ

続古十五 後拾 わすれ草はえにさしてぞ住吉はなりしもこそ袖をぬれけれ

後拾 続 かくことにもなくさむやとてかくこゝろもきるよしもこそなほまさりけれ

千九 ちりぐにはかくしはぬ乃ゝあし?にはなにしもこそとまらざりけれ

此一首のしハなりてのことあし。にぐ俤もとまらざりけりとなりしめつらし

○さてぞ 下にぞを添るもほど。をもハ有あし

是に三つのかはりあり。一よハあまりにさそとうたへ

拾二十 秋がれをみなそら秋しとおもひきん人をも花のさてぞみつる哉

千十三 とはさかなつゝ玉は見えひしきによさてぞそららみゆなしつ

金八 ゆふまと八重むかりねてやこゝをしきさてぞえしらと人りかゝるな

新十又 おのづからさてぞをゆきとおもふまふ人乃とちぎとあり世

旧二十 たしなべきしうれ身をさてぞあることかくるみちある恋のかゝるのとうは

二よ八なぞとおもしそよるま

金四 おとろやかゝ里の小野になくしきて決さてぞえかりみち人を待らんま

千六 いつ川のまふうきひ乃名はこゝろうんさてぞ嵐はおとのかはりそ

新八 なき月の秋の面影して秋そへさてぞ人恋しかるらめ

新勅又 定家 音ぐれとつ袖ぐらにもさぬ秋の日よりさてぞみむろはさもしらめ

新又 けみぢ染をさてぞいはしのもる雨の嵐の山辺とあめをはらなる

三にハいふとんぢて おさむるさまそ

全七 あさましやなどかきしもゆるうしれ家 さこそ ぞ。何方もさこそあらめ

チ十二 ちひ志あぞ わすれじともふ思ひ出よ さこそ ぞ。つらき心もあらじとも

全九 家まらし さこそ ぞ。諸乃らこ都し先きさしもおきてかつるべしやハ

千又 秋よ何へども さこそ ぞ。萬はいろづる先何なくし先の紅葉はきしきや

新十七 山ぬかく さこそ ちらめさかよう思ひしをまで何いとハあらんめのは

こよこのさこそハ。神家の耳にハいきてうみるりがたし。されバ本よりいふといふさまにあしざれども。なやしにんねたるにたハ好みりあきし。さこそハ何方はちえうしおけ

ともハいふ何方はをとをかあれバそでもとんぢて中し。さこそハつらきんあらむも八いふつらきんあれどもさてもとんぢて中し。さこそハ諸のところ先ハいふ諸のと

こあれバそでもとんぢて中し。さらもハなどの先づかハいふ萬のいろづあれバそてもとんぢてけ中し。さらそもんを本思ひとハいふんハかよへバそでもとんぢて中むるし山家集ふ

何みがらふ底をさへふく花なるさこそんうり花をまうせめ。こよこといふ花をんよまうさせバそてもとんぢて中し。又かぶふちるさこそ梢の花みしめさらしハのこせむ

のらまで。こよこといふ何ぶふちる梢の花あれどそをとんぢてよくきこゆるあり

新口 あらひ月の さこそ ぞ。森の志げくうる先中ぞるゝ月は袖のせむぬるし

こよハさぞとかしそうる意也。文をいふ家の志げくあれバそでとんぢる方也。さぞめがらし。いづまうてとも下句とのうを合わのゝあり

円十又 人あしばおかりふあらろきいひてましよしや さこそ ぞ。志づのをだ巻

こよハ下句のことをすしぐろれバ。さこそのこども定めがたし

○さもこそ 下にその係るを同じ

古十三 うつふそ さもこそ 何うら先萎りしさへ人めをめぐると見るがさびしさ

後拾十 あふことを さもこそ 人先かくらうしめあらろぞかりハ見をても見しなん

千十六 さもこそ ぞ。親のむべき世なれ孫ど何とさにみふやどる月ヶ那

続古十又 恋しさは さもこそ あらめなふと又床しきかなふも忘きざらん

狭衣 うれふしハさもこそゆゝしき孫ゆきたつる此子を竹をかこちがほなりや

件のうたどものさもこそハさやうにもと云ふ意也

金七 菊うしなふかなをえしよさもこそそうつりかはるあらめ

拾十五 さもこそをきえんことはりしかしめるまゝぞとぞ思ふ人のなき

後拾九 さもこそそみやこはかすかにやどりせめうらてあなれきまくらかは

同十六 さもこそそむらさきべりしまけざらめをきやくとえし駒のゆくらん

同二十 さもこそを宿をかちしめ世をみよしのは松さへ秋はありにけるかな

金二 さもこそそみやこ恋しき旅ならめ鹿の音にさへぬるゝ袖かな

新八 さもこそを同じ名すとは名ありし名かゝらぬ孫まるかあて宿るかな

右のうたハ上のさもこその中はいふとへる格と同じことぞ。さもこそハあひえんとのかゝりのゝめハ。同ふきえんとのかゝりをれバそをとゝのへて生ずるぞ。

その外ははぶきつ。これになぞらへてしるべし。

○しかと結ぶ格 此しもいもゆるしも志ハ下にかの係あるし。かを結ひのかよひなれば。此く出る此か結てよむべし。徒るハ誤なるべし。

後九 うひもえぞれぞきことをあだ名し時かりふるこそ身になりけれ

後拾十四 ます河濁やまして敷は波よりかへせしあすは程こそかくはねぎしか

金三 有明の月もかはしの浦かぜ波ばかりこそよると見えしか

古大 花ぞ散しこそあるにあひしかどふ出て人もしひとすてなくも

拾二 春来ではきてきうんともこそおもひしか山路こぎすぎおくる門かん

同十六 ほきしかれあれこそ見しか桃の花ちるは惜しくぞおもひぬる

同十九 志のびつよるこそきしかか夜人やえんとは思をさかしき

後拾 十七 しぬばかりなげきにこそはなげきしかいきてとふべき身にしあらねば

まく

同 十九 たゞちにはそむかれてこそやみにしかことはいづこぞ立かへりなん

にしかハ過ぎにしといふに同じ。されど同じきのしかばといへバ。格ハ同じきなり

こそとかゝりてしかと結ぶ格を。三轄の内に立て。後の文に出す(?) 上つ巻第三 後撰八十一の

上に説ゐ出せる如今又別にかくいひまじへ出せるハ此格古集より

はじめて六一代集にも数あまた見えて。いとみやびやかなる詞なれバ。

近き代にハまさしく此格の意はえざる人多けれバ。今くハしくいはんとてぞ。

同集一きのふこそ春ありしかとおもひしまにみ山の霰音めきぬなり。新後撰十六 おもひ見しきまでハ見ひしかとつきにぶふもやと紅葉ぞ。これら八こそと同じ いひはしてしかと結べり。同じ心ハ古今のをよぞさくへきあしからぬと 言まさバ。こそそよまつしきまでと改めるぞよくになるべし。新後撰あるも

思しきにこそといひて見しかをさへいひしねそありしの意ぞといふにてありや。されど まではいへるも猶いふぞやおぼつかなし。又後左の見え誌なるよりかくく祝にありつ てまちしかる人の秋の初風。此しかんとぞ。又土左日記の詞に一ゐりをぶにありぬ あのしかありし八十ゐりにありてぞとゐぶ。此しかいと見べし

○ましかと結ぶ格 此かもまさちかにはど。続てよむべし

赤染 後拾 よしむかし花散りけるぞバかりもうくまたゆくとこそよそふべきうらめし

全 同 そしらぬとぞかりこそ。ときすましわがまちうへにつのりざりせぞ

千古 和泉式部 ま川のそでもかゞりこそ。をいつまし思ひもうけね秋のゆふぐれ

○しと結ぶ格 附かし きし

後八 すみちがくきましし鐘とえしらぬも時雨とともにふりてこそあし

拾九 長歌 ちぎりし後とはふがきん袖とこそえしらく まく

こそしかと結べると同じきて。かといへぞ。ぞしとのといへるし

新後拾 八 おもふこそぬくたきてし秋霧の袖ゟまれぬる音羽川のせき

風十三 後京極殿 うれしとこそなが見あれぬし山のちふ空もと形見なかり明の月

こそうハしと受られども切らずして様下なるへつゞきたり

まて

古四 秋の夜も長こそことふをかはし草むしおぼふむし結ぶまで

同五 君のきて霧なれぬきこそよるかはし山のふしき結おきバうつちる

こそうハかはしと結べり。此しハ上のしよハうけたり。かるんを轉じてかはしといへるなり。又

後拾 六 かりそこそよがきにきこしぬなき取る大やの池みうそどなりせし

新 一 ほのぼのと春こそ空にきにけらし天のかぐ山かすみたなびく

こそうハけらしと結べり

まて

後 八 むかしこそ今ハたちしをみよし野の山もまきつせ聲もきこしぞ

こそそらーことは結べり。すべてらしもしハ万葉にあまたある辞くべ。そもしくこそとかゝりてらしと結ぶ格ハ。一の巻三の次又後ちを出せり。是ハその下にもの係るあき

○ぞと結ぶ格 是ハ上の字とらふきのきたる

十二 よき人ぞとりとぬる為君こそ見せバやとおりふ袖の音ぞくを

後拾 十 君さにこそ人の心をうつろふを名ふ見せつる山ぢらしつ郎

玉社るを 後撰 美りこそみやこ結すも見るべき袖ゆし波こそちらぬしもがめ

まて

新千 十三 音なふこそかよびし梅をいふかて あれなうれなかうれなふらん

同十七 光にしこそ流へし梅を玉ふ君よふなかぞよかむん宮なあらむ川

此二首ハ前ゟ書りてらとハ。上の君と受るがら切ぎもして下へつゞく格りとかなり

○ふと結ぶ格

新拾 恋 明日までもまたるべくもならぬ世の人まつまでを〔こそ〕ありなんと思ふに□

金 十 いかにして逢見る月をのみ〔こそ〕なげかしに今ハ日数まつ程の知りけれ

こそといふ知る力ありて。下のをといふことにちかし。又金葉の方ハ間に志めりたるは。志と文字ぞ切れて下へつゞく格する也。又志ぬを志ぬと云たよりなき

○ ひとと云ふ格□

後 十八 世に□つまつる身〔こそ〕流されて思ふらと数ぞ見るべき藻乃系かな

千 十三 さがさ〔こそ〕床見も床に思しぞひとも紫もしもいつかありせぞ

新勅十四 元良親王 いまし〔こそ〕人も見るひと笑川おもかる人も逢ふじ数見ふ

続後撰 十四 ちぎり〔こそ〕ちぎりしもかゝるひとも同じ見る月や見るらん

○ ひと文どと云ふ格□

後撰 十九 伝法する世のちるに〔こそ〕あらぬぞもわがちぎりと思ひ数まん

新 十六 和歌の浦に家の風〔こそ〕なけれども波よく月に見しはおき

続後撰 十七 慈鎮 うれ身に〔こそ〕また山陰に志川めぐりあふ月を見せむや

続後拾二 中務 かくて〔こそ〕見ちかくせざりし秋の夜の月をも人を見るべかりける

後拾 十三 逢坂をいづかたぞと〔こそ〕笑しかど志るべつゝ其ぞ有ける

玉十二 弁乳母 ちぎりこし□〔こそ〕思へどかはらねど宿ハ数ぬまつ川波

源氏 須磨 志る〔こそ〕うきよの春もあるなれどゆくへも知らぬ海士のうきてを

○ 志そのこふにはそのそふる也

後 十六 忘れてふ事〔こそ〕浮世の日の事にかゝるや人をおもふなるらん

新拾遺 十七 かりに〔こそ〕見しかくのまゝは志とさりに見つこそ人や待まふらん

此まへの歌こそを更なる辞なし

○あのき又

六帖 ちるといひてこぼしよるを見しかばまくらぬしも[こそ]まつにまされる

蜻蛉日記 萬代をよばふ山べ乃ゐのこ[こそ]君がつかふるよはひなるべし

栄花 玉のかざり わかきにし玉の緒久しきにかけられどなみだのこ[こそ]袖にかゝれる

これらハ結び辞なかり

信明集 そしぬきばなすきやせんと思ふ[こそ]行むと見ぬよりも恋ハさびしき

こそとかゝりてきと結ぶなり。日本紀萬葉の頃まで八例あまたあれど。古今集より
こなたにハ見えてなしぞ。皆よからぬものなり。

風十 ちてとよもとまぬ身ハまくらへしうきなれと[こそ]いひし植うら。

これハ下たるきのにあまて切れざる格ノうつされた
格そのそぬなるなり

千五百番 行ふをは美しのを[こそ]なるひきそうつたなきこよひきなりけり

これハけりとハ留りたれた。こその辞けりとへハかゝらぬ。此歌の結ハこよひになそ
きけりとひそぶれなるぞ。めし又美よのこそといひて三の句を当たひきつけるとや

うたいづれかゝるりぞ。すべて其結び辞ハなくても。おきあまよりて。上のてにをはをえくら
きなをざるを常まてさとるべし。此集の人の歌ニハ此係りつゝたわることし。

同 夜ぞ川風かと結ぶ河原乃みそぎ[こそ]秋やくらん秋姫結て恋

これハらんと結べるがつるのをなれど。間に結ひのやりどりへあればこゝろうきぞが
ともあり。結るに此歌様なるへ。ひがきてにかゝれぬなざなり。

大のみぞをいづれもこその語のひとつし。たりとこその結びも上
に行なるぬく。三句のかにかと続くわるを見れどもこゝち例にまで
きてみずらによむ先れ。此語ごをたるなざし

[と]

○とハすべて切る語を請てなをたとし。さる故に上のてにをはを結その

なる。たゞしとより下へハ及バざる也。結ぶまに経との格あり。たゞすべし。

○定まれる格にて切まくる語をつゞくると

後拾 六 おぼつかなくぞ思ひつるかな〔と〕おもひ人ぞと思ゆる山ハまだぞとまりて

金 二 いまり山しのゞまやえまし郎なまり川ふ志まし の あき〔と〕おもひ人ぞ

古 一 まやうき花やおそき〔と〕きゝとかんうぐひすをぶもなかぞも有らむ

同 二 なとゑえし志ともやらる〔と〕さくら散るを待ちえてちらばちらなん

同 八 えぞしらぬ心ろえよ今たゞば誰やうするゝ人やとそぬ〔と〕

同 十五 ひがむく家をたかうん人もがなさぞをやうに〔と〕よをころえん

同 十七 かてえやまいざさ立よりて見てゆかんうしへゆる身ハおいやまゆる〔と〕

後 六 秋の世りしおく露霧をはさえまバむやまかる〔と〕おどろかれつ

古 三 行し河乃山路さきをまりえへてるまりまさる〔と〕旅をのぞぞ鳴

同 十七 住よし諸まし の なめ妻人いかばいくよへし〔と〕とハまし物を

同 十九 身はまてつゐろをぶふともかまきづつひ見えいでまる〔と〕恋ら尽く

後 三 そともふとそ花まるとえ見え〔と〕まり川人のちぬ物ゆ恋ふ惜きまる那

右のむすび上りぞのや何こそとひく。おのく其定まりの結び辞にて切るる也。又でき〳〵ことも下のともこれに准へてしるべし

○定まれる結び辞の格をそなへて言ひくると

後 十一 みるめかるうらぞ行ふにあし〔と〕きくたまとをさへやあまはかづかぬ

続千 六 家隆 かぜ秋青り今や行きぬ〔と〕あらむきバ経雲晴し峯秋たし雲

新千 七 敦忠 うち汝手におもひやり川〔と〕ふる里乃ふまし立ちかるる里

拾 五 ぬくへぬ松と竹ま末のよ代いづまえし〔と〕思のとぞえん

後拾十一 たく山路真木の葉末のさゆる雲乃いつるべし。と見しぬ意哉

玉葉 いせ物語 いづくまでおくりハしつ。と人とはゞあかぬわかれのなみだ川まで

右の哥どもハ上よぞや何などの辞あるゆへ、其結び辞の格をあげて。とゝ云なり。此格ハなべてのうたにハなけれバ、こゝに此調の哥をくらべよあげひて、よくとりわくべし。○家持卿家の歌合におのづから行ふなやかふと云ハぞバ意ハ別をもなぎ川べきうたといふなと。おもふやうなといへる頃。のどのふしぬまやあらんと。後葉での判にみえしるハ、かゝるといふぞハやの結びなりけん。かのどのたゞぬなれ。おのづからのどたゞぬやうにけりしるも、あれど去り行ぎたるめく。此例も多かれぞ。涼き難とハよべりけるぞ。又新葉万葉下巻に山深のあなきとてそ見て浅き秋のお葉乃落てかくせぞ。これハ上よのとりひて形きといへる。結びの格りあひしれども、がりてきけど耳にさりて堪がたし。あしといはん方まさまり。

○何と思ふことをぬきて云ると

古四 いつハ と ハときハわかねど秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

同八 志ひてゆく人をとゞめん桜花いづれを道 と まどふまでちれ

同十五 わすれ草なにをかたね と 思ひしハつれなき人のこゝろなりけり

拾二十 世中にあらましかば と おもふ人なきがおほくもなりにけるかな

こゝろの△のあらましかバ、ぞたらぬ詞をおぎなひて、なをふくめてとゝとあり

○何等結下をとゝ云格

古十一 夕月夜さすや岡べ乃松の葉のいつ と もわかぬ恋もする加那

後一 いつ と もまたぬ〳〵にまつみよしのゝ山をながむる

古十七 秋霧のはれてくもれば山の木の葉のうつろへば人のこゝろもいかゞ と ぞ思ふ

同十八 みやこ人いかゞ と とはゞ山たかみはれぬ雲ゐにわぶとこたへよ

まる

古四 いつも と をはるかにわたれど秋のよを物思ふことのかぎりなりける

新十三 あふゆき□と たれかひもいまはゆふだちかゝるまちわびし山端乃月

右のうたども此格ならでいづれも上のてにをはのかゝりのひハとの下□

へも及ぶなり

○上のてにをはのかゝりのひ乃とは下まで及ぶ格□

古六 雪ふれば木毎に花ぞ咲にけるいづれを梅□とわきてをらまし□

円十五 なるをえよ□と人けるらん春くる山の川里とほく咲し梅を□

後六 いづく□とてたづねきつらんむらさきはむかし此あたりになくに□

新十一 みかの原わきて流るゝいづみ川いつみき□とてか恋しかるらん□

円十七 晴し衣ね山もなじみ川□とてうかのとまれるに雲の浪らん□

六帖 きのふきてあすもひかけし狭衣いくよへぬ□とか袖ハぬれつらん□

此るいの格いと大事なり

○と二つ三つ有る歌□

古三 かへる□とみえバいかなる友ぞ衣をかへし□とやなく山ほとゝぎす

後拾一 いかにねておきけるしかのはつこゑ□とはぬを香を□と

後十 うきを聞し□といふそらぞなかれめかなしび□と見えぬ□と思へバ

○うたの上に□

古一 ゆる□とつく□と見えぬ梅を梅花川乃人まつらん ひとしれん

此二つの□と 春きて聞しといふうちに有かと いふ一つの 梅に植き十二月のうちに二とひののを おりかへる心をあはむことはとなるとも知るべし。 あらは此格のきびめなるすハ下にくまでいたり。

円五 ほのかにもいでぬ山田をかる□とて衣いまぞのあまねね月ぞてるき

同八　秋なれや[こそ]　かゝる月日も　あらぬまに　むかしにかはる　ねざめとゞまく

○こそはこそのこと　□　こそハ雖の字の意

全七　たちながらきく[こそ]　うちつけに　花ぞちる　ねぎ事も　さぞく思へど

新十三　その名だにバ人をまつ川　ちかき山なり[こそ]　我身まし　都いさよひの月

かげろふ日記　うつし心をぬくめる宿に　とまぞしたるに　ありやなしやの[こそ]　かひやなかるらん

堀川後百首　うたゝねにこがうるふことありせば　なり[こそ]　よがるゝとみえてまし　うたゝねのはし

同　あしかく[こそ]　身をも及ばじをとめこが　むすぶてをこそ　誰にみせまし

拾遺みづゝとを果きてだにいふべきうそ、なまるもなきを。左のめぐ流むるとを果きて　いつるハといやしげに。かくいへるは例まれなるを。ぬましかるぬ辞なるん

後十五　○一つのこそ　□

あしびきの山のかひある　さかしはきも　人を待本なり[こそ]　とも　□

後拾十一　いそぬまはまだあらじかし　ぎりあく　わが思ふべき人もあれ[こそ]　とも　□

新十七　たく山乃あきはあるとにくらべえよいづこか　恋はまさる[こそ]　とも　□

拾遺後六　むかしみし　狂ふる庭は秋乃月あらばむかりのいくめぐり[こそ]　とも　□

こそのことハ　つよの雖の字のまはこそとハ別なり。　さてもこそのこゝろ　はよてもハ雖し。さる格あり　とそへてもたがハざるなり

○一つのこそ　□

古十一　あらしふきかへりやなぞ[こそ]　わしかきのまちかりれあこうふよしあき

此なぞとハいづなぞまてとよみつ。此こそかく例なし　なぞと思きゝ辞也。六帖にハなふぞとあてとのみぞなし。又後撰十五則　あけしなき思ひや　なぞとうしかりの我ふあくまぞ　うたぞよびしき上二句合く　左のたぐのおもほど。但しこゝハなぞと我ふあくとはるゝるバつよのとあり。

同五　よがきつる方もあらまぼしらぶ山本のはこのものちり[こそ]　まがふふ

曾丹集　ちじとみふころうるき紙はりてむちる[こそ]　まがふふさへるあらなると

此こともおなじ

○一つのこと

後拾 よが半ばのありつハ清しとみし山本はありこと こそねがはぬ中なれ

同 大 よのなかはいさ こと いさや風はあをき秋の ふくちてそかれ

此ことハつゝるをまもてつよくいふとき。かにきさめり。日本紀のたゞこと訓つま さハ神ことも神ときこえてよるとよの神をうちきこえまするもとえて。源氏物語 あらゆる法の詞ぞとつくすはことうはしと有。

○お對へていふと　與の字の意也

こゝハ友と秋と。花と露となどくお對へていふとそばとあるなるがなし。

但し常はてにをそのとき。上を切て格の辭よりあるをしく（此ものにて）此とハ

清どく格の辭（又もかでえ 中切の辭也）よりとあるを定まりなる。

古 三 夏と秋と ゆきかふ空のかよひぢハかたへすゞしき風やふくらん

かやうに二ことならべいふはつねのことなり

同 ちりぬればこふれどしるしなきものをよりぞ蝶と よがよると ある川の花

余りは一方にのみいへるはまれ

新 十八 おほ空を本と立まよふ雲と やらしけれと いづとらからせとうつる秋に唐

かやうに三つならべいふもまれ

同 巳 月影のすみ川 秋風と ぬるゆけどあるろづもしに袖をてそ花へ

こゝハ御秋の方にのそらひて。月影の其のとらひてそいそぎハ月影の方を主としていへるなり。此例をたりぬ

○されども

三の巻もの治よ出来

○されよ

この巻よの歌出来

○およそ上に結び上る。切るゝ格乃辞より受るが定まりなり。切るゝ格の辞とハ ぞも徒の六行乃

但くの辞あり 一二例をいはゞ。「行とこそ」「なしとこそ」とハいはず。ありとやこそふ只をバといふ なしとやこそのさびひ

が定まりなて。「行くとこそ」「なきとこそ」とハいはず。「行となし」ハ切るゝ辞。「あるなきそ」でく辞なり。下ミるこれ了准

へく知べし。又「あるときこそ」「なりきとこそ」といふが定まりなて。「あしとこそ」「ある

あしとこそ」とハいはず。又「なしとこそ」「なしとこそ」といふが定まりなて。「なる

とこそ」「なるとこそ」とハいはず。又「あくとこそ」（明）「いづとこそ」（出）といふが定まりなり

て。「あくるとこそ」「いづるとこそ」とハいはず。かくとも述べてあるなかに紛るべくある

べし。近き世の人の此まちがへを誤ることつねなり。新後拾遺三 頭とあるにあかるときけど時もまだ添きよの月ふ鳴く 同十九

いづるとも汀なえて足引の山の尾上にまする月影。風雅八 ふもとの名りくちる雪ふいづるとも

あき月もそさなし。新拾遺十四 影の出あへるの涙の志貝あへ 志まし弁ハふるなと。右の分ちこあこの上

のこゝる辞の格なり。新拾遺の言ハ万葉十ゟ主て。今の本の訓ハ誤ヿまたぞと弁ハ。まどもとき。心の句意見え

まれじといそぐ。結句ハ必ず弁ハへぬともとてそらへきまふあるらもしと。行るハふみてし。又新拾遺十四 行しとゆ

くるてふ海士にあらなくにまでのぞる人ぞ行ぢやく。是ハ古今の本なるをとりて。くるてふとぞ。

来とつふといふなきバ。とも云る格にて。くるてふといふべきを。くるてふといへるハ誤なり。

但し上にそのや何そなどの辞あれバ。その結び辞よりうけることハ上に出

せる條にいひおけるが如し。

ど

○どハ下へ詞を添てども ともいふ。かをかども とも びど どども 雖の字なり。此雖の ども かれど 同じ也

字の意に清と濁とのかはりあり。既に結べる詞にいふハど ども と濁り。いま

だ結ばざる詞をうけていふハとども と清ていふ。此清濁によりて

上の意も大いに違ふ也。花をみれどもといふと。花ハさけどもといふと 二つながらに

心もくるまなどもへくさとるべし

しあることもなきハ今出さず。濁りて読むと上のこの詞に出せり。さて濁るか
らにしかどもしかどいふことあ

古十二 袖におきてむすびにしかどもまたありぬきふし袖とそでこそへん

同十七 人しるを里をいとひてしかどもなくしれみやこともらはなりき

新十又 身にちかくきふける袖をぬらしける秋をばよそにおもひしかども

古十六 つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとハおもハざりしを

後十六 むかし世は袖むすびけるしかどとりむすびしはみかよき

千十七 しらぬ山花をまつとてさえしらぬ春われみやこにいえハ今しかど

此しかハそのむすびのしかと一つなり。さてしかどもしかどハしかぞとお對する辞なり。

此外のどぞどとハしとあるも有べし

を

〇はねのをハたとへあることなれバ出さず

〇やを先辞におくを

古十三 人しれぬおもひをなきたれしのバれど看もいまもしのびを いえん

後十九 袖ぬれて雲かさなりてそでかへるとゆくとおもひそむるを さん

拾十 ゆふぐれをたのむ隠れの世ハよづかりしゆきをふみわけてはらんを きれ

後拾十九 よしのかハ岸がまのらといのちつくたガ出たのまれしを えんよ

玉三 新続集 五月雨は月のよのまにやまきる夜を恨みてぎすぞぶさやかにを なき

〇玉のを五

古四　萩が花ちるらん小野の露霜にぬれて゜を　ゆかんさよハふくとも

同又　立とまり見て゜を　わたらんもみぢ葉ハ雨とふるとも水ハまさらじ

同十三　恋しくバしたに゜を　おもへむらさきの根ずりの衣いろにいづなゆめ

拾三　よもすがら見て゜を　あかさん秋乃月こよひの空に雲なからなん

同　露きくて玉がちるともてをやどぬるともをりて゜を　ゆかん秋萩乃花

新十又　花がたかりえつ゜を　まるん佐竹山雲まからしそ雨もなかるとも

○ものを詞の事

古四　ひとりのみながむるよりハ女郎花わがすむ宿に植て見まし　を（ナルモノヲ）

同又　秋のきくにほふかぎりはかざしてん花よりさきとしらぬ我身　を（ナルモノヲ）

同十　秋くれど月のかつらのみやハなるひかりを花とちらすばかり　を（ナルモノヲ）

同十六　つひにゆく道とハかねてきゝしかどきのふけふとハ思ハざりし　を

同十七　うれしきを何につゝまんから衣たもとゆたかにたてといはまし　を

同二　雪とのミふるだにある　を　桜花いかにちれとか風の吹らん

同三　夏の夜ハまだよひながら明ぬる　を　雲のいづこに月やどるらん

同五　白露の色ハ一つ　を（ナルモノヲ）　いかにして秋の木葉をちゞにそむらん

同十一　人の身もならハしもの　を（ナルモノヲ）　あはずしていざこゝろみん恋ひや志ぬると

同十二　今ハゝや恋ひしなまし　を　あひ見んとたのめし事ぞ命なりける

右のよつの歌ハものをといふ意も其中にあるといふ意を加へてきこゆるものをといふもたゞなるとも意ハ同ド

○ふよ毎ふを

古六　花乃いろハ雪にまじりて見えずとも香　を　だに匂へ人のしるべく

後拾 八 みやこいづるけふばかりにとつらねしを逢みて人[を]見られましかば

古今集の羽衣などいふも此を行り家集などにも有

○一つのを□

古七 わびらしに静なる江郭公らは年[を]行ひども有けれ

同十五 行ふこし[を]なびしは楮のながれへしこそは流るまに年ぞ経にける

これは行ふことをこひわたると云ふ意にて此はわしれど行ふことをもしろしと云ふらひきぞ

[に]

○一夜はにをあるこそ頼みてよ

○にきにしにつきとにきんにをりにしげみ

此ならびのにハ万葉よりの字をもちて掛けてなりてなかなにもはじまる

後拾 十三 ゆくとかりしまにやと[に]せぞわかるる桜よりかとさだはし

玉九 拾遺 くやしきのそこぞかりぞにあれ[に]せぞよすがまでにとりぞしめやる

拾十九 涼しき葉のみなべ乃なつのとまり[に]せぞいづるの空に立てるまし

万十二 神無月あめ間もおかず[に]せぞただ里のまに宿りかりまし

家 玉ぼこの道の来てきえ[に]せずともたまつきまし

これらのにも同じ。猶此事どもを云の

○ものをとりいふ近きに

古十五 そきをうゐのゆふてわが人のきかく[に]

同十七 ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

後七 秋の野のにしきのごとも見ゆるかな色なき露はそめじと思ふに

万十五 青によし奈良の都にゆく人もがも草まくら旅行船乃とまりつげんに

新三 有明乃月をまちしぬに出ぬまでなど山のはにほとゝぎすこゑ

同 庭はおもはますがだちぬに夕がちは霜さりぎなしとめる月かな

此のたぐひのにハ。ちかくいはゞ。ての。にゝあたる

○なくに

古二 桜花ちらばちらなんちらずとてふるさと人のきても見なくに

同十四 みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

同十七 誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

同二 春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花

同十九 むつごともまだ尽きなくに明ぬめりいづらハ秋乃ながしてふよハ

○なしに

古十一 浅茅生の小野の志の原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに

万四 てる月をやみに見なしてなく涙衣をぬらしつほす人なしに

古二 とゞむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふこゝろか

同三 ほとゝぎす我とハなしに卯の花のうき世の中に鳴わたるらん

○一つのに。

新二 赤人 春雨はいたくなふりそさくら花まだ見ぬ人にちらまくもをし

これハ万葉より出たる歌にて万葉にハなを
此たぐひのにハのにごとくなれあると

〇一つのに

玉四 まつ秋乃こゝろへの色にむかふあり尾花が風に庭の月影

同五 ながむる庭をかきはらふ虫の聲かぎりなきハつゆのやどるまでの秋

同十 うれしきかなうれしくもひとりあひかたらひたるまつにえし宵に今の名残

あかつきにこぞりてかなしき二つをよびくる間になげきをしめるものなりや。いやしげなりし事なり。又似たるをあげつ。風雅又後拾遺抄にもへとぞさるこそあらしまたくるより夜のまちし月になきしつけてきたるにびと見えかくしても月ハ猶の名をおもひいづる事まではちひもて猶の名ハいつかあるべしいひてよみハ行つゞけれバなり。

〇一つのに

風一 はつしぐれふる音やまてふみたえしのでもなをとふ子孝の毒に木かげん

新後拾八 秋に見えし花のみえなひも世をうしなふ君ゆのこまる庭のちる菊

此あるぐひのにめりにいやしく思ふ秋に見えしなどハ近き世にハ清て乃るにあるなれど。古き言にハ見えしぞるをもじごとハ秋見えしといふべきなり

あるをさてハうりたりしがやむをえねバ秋見えてしとぞをいきぬ。式子内親王乃 秋にとうもかくるよみきやらかずハかぞえて其のままに詠ふ事あれバこと思ひて

〇あふせんに 此の意何の詞より出たる

〇かに 此の意かの詞に出せり

て

〇清のてハ此をよむ所をあし

〇てきてしてぞてよてんてきんてましてしかなてきなど

此のあるひのてハ清の稀用也。此等ハ云の意つゞくるの詞より多くいふを考ふべし。〇てもてのといふ時によむを清てよむハならずとじ。濁るべきよしもなく例もなし。されど清てよむべし

後三 かくながらちらで世をやはつくしてぬ花のときはもありとみるべく

此てもてと一つ也。此歌上句ハさらぬをまくてもある也どもと人のこころにわかれやはせぬといへる歌の下句と同じ格のてにをは也

○にて

新十七 よしの川こころだくもいふならじしかぞ思ひの思ひにて

後古 おもひつゝなぬるらしをみるべにてなにまさる物なくころもなりけり

旧十八 今こんといひしばかりにいのちにてまつほどにねべしはかなきわざ

拾十八 あさましきほにわすらるべにてくるゝは山の嵐ぞふかん

旧 まりがえはかよへる枝をみるにてなぞそらるべき波るのむかし

旧廿 むかしへむかしのちぶきをみるにてやくもみ深のしきよきく

後拾十 されはてなるものなるべにてうれてかへりていなむ

新四 浅茅乃露はよすがをもちぎりにて置をバいまぞ秋のきよにはなる

旧 身ならぬおもひを萩のうへにて此ぶるらし夕暮はなく

かくの如く上よりをとかゝりててとはいふ一つの格なり。此かつ他の手ハ恐と彩る也

○ながらにて

古今序 はく花よりながらにての意也

拾十四 万十一 浪立つよ小倉の夜のほかきなさ身にいつきのいるもながらにて

古四 秋萩をしがらみふせて鳴く鹿は声に八八ながらにて鳴時さやけき

後二 花こながらにて年八しまず花見るへんめりし行ぶ哉

旧六 万八 見がめど後尾ながらへの声ぞ聞ながらにて知ぬく掛にもが

○てへ

古 十六 今さらにとふべき人もおもほえず八重むぐらして門させりてへ

拾 十七 むかしより名高きやどのことの葉ハ木のもとにこそおちつもるてへ

同 十八 森のこや子のしげるてへぞ高砂の尾上にたてる松もおもへり

六帖 ちひてへぞちらぬそこにもゆくらかくふあやしくまどふ心がくかな

これらハといへをつゞめててへといへること。といふを清ていへるなり。さて二首ハての所へ入べき辞なれどもかくてへといふにつきてこゝに入

○てな　三の巻なの部に出せり

○てよ　五の巻よの部にあげたり

○なで　四の巻何の部に出せり

で　濁

○で　でハたゞしての濁りたる辞也。つゞけのでもことなるべし

○なで　此なでハなんなどいふなと一つにて。其の濁じたるなり

古 十三 みるめなきわが身をうらとしらねばやかれなで海士の足たゆくくる

後 十八 かひもなき草の枕におく露のなにゝきえなでおちとまるらん

拾 八 うき世にハゆきかくれなでかきくもりふるハ思ひのほかにもあるかな

新 六 中〳〵にきえハきえなでうづみ火のいきてかひなき世にも有かな

同 八 おりゐておもひしるかにまがひなで立おくれける春ぞかなしき

同 十又 ながらバ恋しき人ハ忘れなでそへてハなどかたのまれんなき

同 十八 つきもせぬむかしのまねびもまだ逢なでたいて人まるかぜのつまなさ

同十二　わたしもりはやく行かはそ雲はなほ夕ぞわたる立なとくるしおもひなし　なで

全集三　天の川　思ふさの舟に渡りでのりてまづらむ　渡せ　みぞらて　此でもなで　のまにありま

な

○ありな　ありしな　恋な　おもはれ□らな　恋ふな　ぞやな　などの類ひ　見せなや　なゆるぞやな
かゝりな　かしな　よな　さぞな　行きな　かなしな　つらしな　ちぎりな
きなはさらひ猶おもし　　千五百番歌合　おもひなりぞな。夫木集後拾遺なき　なのみなとやな。同拾　昭和文風雅兼続集などにありとなどもハいやしく
きこゆ　文字葉にもんなといへるあり。古今ならとかくは此例なし。又ハ名まへな
まかりしもなきなるしもなかりもこ。うべなく　ハ古今集の家ことなりき

後十三　人ならのたのもしかたさは雉波なるらし葉の根さつなし　な
同十四　草井にかくてや有明乃つきなくてやらふまでそとハぬ陰らし　な
拾七　秋風にしらしもよりおのづからふく秋萩の露なるかな　な
後拾八　天の川後のけふをさへなるまたいつなる秋ならかなし　な
いせ物語　いと行もれなくぞ宿りなるうらしなちきなる物思も我八さくれ　な
ともかくハなとぞ見えるなる

○なぞ　三の表を　の初より出　なで　此表ての　終より出　なまし　なくん　なぞや
右の歌のなそねの清をきらるまて吉も見え此す　六の表のぬ
かるの終りしくいふを考へ行なるべし

後十一　さえてやみそし　な　ね直坂乃実なとするハなみといふなり

此哥も同じ哥じ

○恋(こひ)の心の哥

古十一 人しれず我のみぞ思ふや[哥]花もまたきなとや世に出て恋しきものかは

後七 いづくにか夜を旅ねせんおもふ[哥]かぎりは秋ぞしく思ふらん

拾三 むこがし都ま草川よひの秋風に香さへあや[哥]人ぞ恋しき

此哥ハ猶いと思ひおもしくへきべし

○別(わかれ)の心の哥

古三 立山のしなくほととぎすんけれは物思ふ香に[哥]きり世そ

同四 わくらはの心もろく秋の空に思ひるいさん人[哥]とが先そ

新九 恋しさはいまのまけ川にまさるたちそ露乃風[哥]しまれそ

古一 青柳の糸の八[哥]やきそわが葉のつなもとのかり香もこのかり

同 山さかる人もさきぬはるひらく[哥]えびそ香えもやらん

同五 恋ひしくぞ見てもしものぞんのみち紫衣[哥]ちらしと山おもの風

壬二集右の哥秋の紅葉と見てなりしに哥意よくつくしくさきそ此らハ哥のかの木き香わしくていふぞやすめ。いくつくるくざきそとひふべき定まり。まさ

万七 妹がりうりまが袖めらん木ろよよいぞくる月に雲[哥]あるむき

同十七 香ありしと[哥]もび とが世と郭公おもんさ月をまつぬうさ孫

こまりハ下にそうび哥し。此哥も万葉よハ此例おほし。古くよりこあすは そしぞ。又万葉よ六その下へねをそへ〳〵そねといふも多し。七の光古風の紀 よ出きり。又十七の光も古よハ猶もてるふあらひそよとぞこく。なよあるう。保氏ね 従光業下の類なるも。つまでてあるとおのこまひそよとけり。まさ

新拾遺 まく集 ちりやめるいづし都心の袖のこみゆゑ[哥]のりそやたるとりそある

こまハ下にそやといへりまさ

拾十六 花のちるをゆくぞと見るらむうぐひすの旅ぐらの枝になくなるこそも

元輔集 春がすみたち[な]なよりぞくすしき錦と見ゆる山はさくらに

これらは哉を二つよみたる。一つはうちすてゝひゞかず。又結びのかは。その下へもを添たり。此例も六帖にも。雪みふりぞも。風吹ぞもなどあり。されどこれらは万葉の歌を直してのせたるにて。実にしかよめるにはあらず。

古二、山ぶきはあやな[な]さきそ花見んとうゑけん人のこよひこなくに

これは[な]もじ二つ重なりたれど。上のなは安の意なれば事なるなり。又此歌の二の句を。あやなくなさきそと云る本あるはわろし。誤なり。

〇六帖「わがせこがやどのさくらはあやなくもちりやなむとや」などあるも。上の句を略きて下にそへたる也。かゝるたぐひ。此例も猶あるべし。此歌は万葉十巻に。雲莫田名引(クモナタナビキ)とあるを。なびくとよめるなどもとはずがたり。されど大体は源仲正が。ちりぬともをしへて散る花を見よ。また万葉のもじのまゝによまれたる。同家集の本にて。あかぬとも見る角にはさへなきそと(?)。すべてかくの如き歌も多ければ。近き世までも此類さらにあり。

右のかは。よみたるあやしき歌どもに。哉を下におく(は)正しきを(?)見よ。

【み】

〇一つのみ

古十一 秋の野の尾花にまじりさく花の色にや恋ひんあふよしをな[み]

同一 春のきる霞の衣ぬきをうす[み]山風にこそみだるべらなれ

同七 秋の野にやどりはすべしをみなへし名をむつまし[み]旅ならなくに

同十三 寝ぬる夜の夢をはかな[み]まどろめばいやはかなにもなりまさるかな

後六 秋の田のかりほの庵のとまをあら[み]わが衣手は露にぬれつゝ

万八 春の野にすみれつみにと来し我ぞ野をなつかし[み]一夜寝にける

後五 万十 天の川せゞに白波高けれどたゞ渡りきぬまつに苦し[み]

古五 さほ山のはゝその紅葉ちりぬべ[み]よるさへ見よとてらす月かげ

同十四 かぎりなく思ひわびぬるをひとり[み]身をすつる我をゆるぞまさりける

同十五 ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山乃風はや[み]なり

後六 時雨ふりふりなバ人に見せもあへずちりなばをし[み]をれる秋萩

同七 霧むすぶ夜きる人な[み]やたちかくしくもの夜よりゆくしらせつる

同 秋の月ひかりさやけ[み]もみぢ葉乃おつる影さへ見えわたるかな

右の外。風をいたみ。瀬をはやみ。夜を寒み。山高み。秋ふかみ。風をはやみ。露さむみなどのたぐひハ猶おほし 上にをといふてにをはのなきもあり ほどもあり 又紅葉にハ此みを用ひたるあり

詠み給ひて。後の世の歌は月ひとはなといひて異なることゝかきし。彼のすれをかくしていぶせことゝ。はりしことゝ。意をあげことなど様にもいへり。

古十三 浅[み]こそ袖はひつらめなみだ川身さへながるときかばたのまん

こゝハ浅き故にそでハひつらめといふ事を浅みといへるにて 右の[み]と同じくて浅さにこそといふ意也。但し源氏葵巻に浅みにや人ハおりたつ わが方ハ此古今の歌を本にて 浅きところの意也。又風雅七 おりたちて浅みやぬれん 此みハ 羽の指葉ハ… 秋のものなれバ此みハ…

○一つのみ

後撰一 難波がた浦吹く風に波たてばつのぐむ芦の見え[み]見え[み]ず

千十三 みつしほの末葉をあらふ流れ芦の君をぞ思ふうき[み]しづ[み]

後八 神無月ふり[み]ふら[ず][み]さだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける

後拾十三 みちのくのをだえの橋やこれならんふみ[み]ふまず[み]心まどはす

万十二 あづさゆみひき[み]ゆるへ[み]おもひみてすでに心はよりにしものを

此外おもひみいはずみ。又ふりみふらずみなどもよめり。又文にもかくりし

ちるみ。又なきみわらひみなど有し。又万葉十八長歌にもとめくるにつと

ゐとやまのみの袖のもとをかくりしみおきてかくしみ

よめり 此中にかくりしみのみは上の心とはかはりて みなそのみなり別なり ましく

万十八長歌 ちりよしるのつるは子しはさよしみにあそ[み]あひもちちらしきこと

夫木万葉下 はるばるとあまをおひつるおもひしそうき[み]ありつつも月をかつる

夫木 たかく山のえし[み]えしなる年をにもののかへりかたとをりけり

かくのやく上に一つみとよひて下に今一つをばいそねもつ。されどこれはきてよしとあらず。○夫木万葉下巻に春の月に霞かつての見江須見江須もまがれつ。

これは上の須の字は必写し誤りなるべし。又見しこえしぞもとよきべきなれ

○一つのみ

拾十三 夜半はにしげ[み]におもふまろこまろがまろよいくよへぬらん

源氏 葵 はかな[み]にや人をおもふなげくよはあきもそれつよ涼きこひぢを

後撰恋 あをやむやにうを[み]をたつ月はおもろある夜の夜のそら

あをはなかき声をしげき。浅き声をあかき。うきに声きうさよいつて

よ

後九 まえをつるものとはえつはてかにはゆめのめるんかそさ[よ]

拾十二 春はせり　おもふなきみのよびしきハ身をつくしてぞふ人のしるかね よ

千二 はるかなる花のちるらし我かくぞ見しふるさとハ袖をたれかふ よ

後十九 さらば よ とわかれし時にいはませバ我も涙におぼほれなまし

拾十 おひしげる志しくの松のあや枚 よ 雨きむらさめたちかさぬべく

同十二 ゆきよ 夏衣しき人よたゞひとときゝあての後もよびしかりなき

同 かくしらの松乃うらかはしと思ひしハきれど よ つひに眼にみき

同十三 ふるさとは志ぎさにおもふまろこ夏まろかまろ よ いくよへぬらん

同十七 秋風 よ しるがつめにさらんいかなるよにかわすれんとすらん

後拾十二 有馬山ゐなのさゝはら風ふけバいでそ よ 人をわすれやハする

新六 や よ しぐれ物おもふ袖のなかりせぞ木葉の後になにを染まし

同古 まづみるはたらきぬおくの海 よ きよひの浮のいふかひもなし
□ 千年よ玉のをよ いつごしよ おぎりぞよ ちぎりしぞよ 言まぞよ 乙くふぞよ
□ 志のぶよ わすれどよ 見まるなよ 出くへよ めぐりてなよ ちりれなよは
くめぐひいとたえし。又二つまねてるハ

千十六 此ごろはきらしれ孫ぞこの道ある上毛の君 よ 下はこゝろ よ

㊦ 作るよ □

古四 萩の露玉にぬかんととれバきぬよし見ん人ハ枝ながらみ よ

同七 わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてバ思ひ出にせ よ

此よはひいとあり
まゝ

古十六 みる人も花はなれぬなりぬなりゆきの枝よかへりふせ よ □

新六 ながむれば我が山のはにかげもなし みやこは人よ何思ふらん 〔よ〕

狭衣 早瀬河のそこはかとなく渡りくるかたぎの嶺よ吹きもつくへ〔よ〕

これハよ二つありて上なるハ呼出をよ下なるハ伴なるよ也○玉葉十九なきなきもききも人ハひとてなかりしも思ひ出よ夕暮の空かくきるなるハ消がてにし

○てよ

古四 ひさかたの天の川原のわたしもり君わたりなばかぢかくし〔てよ〕

新十三 たのめおかんたださばかりを契りにて浮世の中は夢になし〔てよ〕

伊勢物語 君見しに恋ぞまさりぬあらたまの年をふる実を今はや見〔てよ〕

新十一 いせ なにはがたみじかき芦のふしのまも逢はでこの世を過ぐし〔てよ〕とや

後拾十六 いのちをば逢ふにかへてかぎり〔てよ〕さてもと思ひて名をぞ惜しまき

詞十 かくてのみよにあり明の月ならば雲がくし〔てよ〕天降る神

万二十 ほとゝぎすこゝにちかくをきなき〔てよ〕すぎなん後に志るしあらめやも

○とよ

古三 やよやまて山ほとゝぎす言づてん我世の中にすみわびぬ〔とよ〕

万九 吾が妹子が志のびにせよと付けし紐いとになるともわれハとかじ〔とよ〕

堀川ろく はるかなる山路も見えずちるはなにこれより奥ハたれゆくら〔とよ〕

全八 あさましやこハなにごとのさまぞ〔とよ〕恋せよとても生れざりけり

新十五 逢ふ〔とよ〕見し面影もちぎりしも忘れぞながらうつゝならねバ

狭衣 逢ふ〔とよ〕見しにも物ぞつゝまうき見るためしもかひこと思ふ

○よな

拾三 長月の九日ごとにつむ菊の花のかひなくおいにける〔よな〕

拾衣 同じくはきせ[よな]行わぬ名衣よそながらにふくらんばやと

同 からき世[よな]おもひきえなんうぶらそも立おくれてはくやしからまし

[祢]

後十 たのもんと契りしことも尽き物をなきなをたててだゞにくきね

拾十五 行かをはんなをもあふくやつくさもさやは契りし忘れて[ね]と

後十三 うきこれ[ね]といひしにかはふ忘れまでとはぬをつらき袖ぞ有りけ

同十九 花の代を鶴の契りしかへてき（本）[ね]さぞ死なきよおなかひもなく

拾十一 あふことは月日にそへくまれ 時をりふし来ぬあり[ね]そぞ思ふ

同十六 春霞は花のなきまにたちそへて[ね]されなば思ひなくそへるべく

新十一 玉のをよたへなでぞ半[ね]なかるべてあふかことのよりのぞはかる

同十二 きえ[ね]しどあふの山乃嵐のかゝ袂ころもあとをみきまで

○さね［　］そね［　］

此詞は八ともかる未ねの活用りしてそ作ちる辞も○新後撰十六玉葉十一のまゝ

有会定家卿ともどなりすま詞よし。よまを添てよめりをる。

これらはなくこ不なるてはぬえだ。七の先古風歌りぞ出る

[志] やも先辞

○やさめ辞の志［　］

古一 さゝがにし添くそへて[志]なりされど消あへぬ名わが花とふゆらん

同　年ふれバよはひハおいぬしかハあれど花を志見れバ□物思ひもなし

同二　まてといふにちらで志とまる物ならバ□何を桜に思ひまさまし

同　のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世の中はて志うければ□（の一本）

同　春雨のふるハなミだか桜花ちるををしまぬ人志なければ□

同　いつまでか野辺に心のあくがれん花志ちらずハ□千代もへぬべし

同　散花乃なくに志とまる物ならバ□我うぐひすにおとらましやハ

同　ふくかぜと谷の水と志なかりせば□みやまがくれの花を見ましや

同　をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道に志たちぬと思へば□

同四　秋の夜の月のひかり志あかければ□くらぶの山もこえぬべらなり

同六　ふるさとハよしのの山志ちかければ□一日もみゆきふらぬ日ハなし

同八　おもへども身を志わけねバ□めにみえぬ心を君にたぐへてぞやる

同　からころもたつ日ハきかじあさつゆのおきて志ゆけバ□けぬべき物を

同　あふさかの関志まさしき物ならバ□あかずわかるゝ君をとゞめよ

同九　名に志おはゞ□いざこととはむみやこどりわが思ふ人ハありやなしやと

同十　春霞中志かよひぢなかりせバ□秋くる雁ハかへらざらまし

同十四　ちゞの色にうつろふらめど志らなくに心志秋のもみぢならねバ□

大方やすめ辞の志□ハ。志の字どものおほくいでゝも皆下にぞ□くまれり。ようく心をつけて詞の志らべを味ふべし。これぞうちまかせたる格にハみえける。○

古八　志たはれてきにし心乃身に志あれバ□かへるさまにハ道も志られず

万十二　おもひに志あまりに志かバ○□すべをなミわれハいひてきいむべきものを

これらハ志し二つ有て。一つの志□ハいはゆる意の志□。一つの志ハやすめ辞也。

古九 ほの〴〵とあかしのうらの朝ぎりに島がくれゆく舟を志ぞ思ふ□

同十七 ちはやぶる宇治の橋守なれを志ぞあはれとハ思ふ年のへぬれバ□

万八 たちばなの花ちる里のほとゝぎすかたこひしつゝなく日志ぞおほき□

同十五 此ごろは恋をおもふとせちべもなき恋のしつゝ袖の志ぞなく□

こゝも八志ぞとつゞける格なり

古二十 あたらしき年のはじめにかく志こそ千年をかねてたのしきをつめ

いせ物語 おほやこの月はめでたしといふべ志こそ思ひみきよしとたてまつりけれ

こゝも八志こそとつゞきたる格なり此格を下にあげたり

古一 ゆきて志□。しとめてもとまるものならバたちはなれじのさとゝ城

同四 ゆふよりハちこえし暁日までいはん志□とのみまち侍るべき

同十二 かづらきや山の中山あらくふなふ志□人をおもひそめなん

同十三 あきぎつ秋のはたにうろをなふ志□。しも人めづこのせにぞむらん

こゝも八何事の下におきて□。かりもしの間にまさる格なり

古十一 秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心にわすれ志もせん□

同 人めもる我かはあやな花すゝきなどかほにいでてこひず志もあらん□

同十四 月夜よし夜よしと人につげやらばこてふににたりまたず志もあらず□

同十九 うゑしうゑバ秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへかれめや志もある□

後九 みちのくの海に漂ひさすらはぬみ志もせん□

後拾五 きくにだにこゝろはうつる花の色をみにゆく人はかへり志もせじ□

源氏若菜 立よりて見ばまがきのまがきのもとにさかりを志もすぎじ□

古四 よがれゆく秋なり志もうつろひゆくに虫のねきけばまづぞかなしき

同十五 秋ならで身をふて志もふかくのみ人乃こゝろはあきぬるらん

同十七 かぎりなき君がためにとをる花は時志もわかぬ物にぞありける

同十八 いくよ志もあらじ我身をなぞもかくあまのかるもにおもひ乱るゝ

後十七 なかなかに見ぬハかきとて志もうたて玉ゆら君が黒髪をなでゝもやらなん

これらハ志もとつゞける格也。但し此格ハ立とゆふべき所に志を上まやも九辞ゆゑあるハ別に下に出せり

古十六 いま志なくさびにし我まちがふの衣かりそめわたるをたのむる

これハ古風の格にて万葉に例あり。万葉にハ今しもしとや此め辞の志を二つかさねておける事もあり

あやよをうたの辞の志かゞの格。万葉にハ猶さまぐおほくあれど。その古風の歌に出せば古風をよまんにハその心得あるべし。

和歌に古今集よりこなたハおのづから定まりたるがごとくになりて。それに出せる格にそむけるハすくなし。されど古今よりあなたの風をよまんにハ。その格をよくしりてよむべし。みだりにハおくべきにあらず。

古九 からころもきつゝなれにしつま志あれバはる〴〵きぬる旅を志ぞ思ふ

同十一 ゆふぐれ志あまたぞ思ふまつを思ひまどふ意を志こひぞわたるめやも

これらハ此志もじ二つあれどもいづれもその格にたがはぬぞ。近き世の人のうたをみるにかくのごとくならぬハみだりに此志もじをおきて。いといやしきをあるがあまた多きに今ここに古今をあげて引出て。この格を志らせんとなり。

いせ物語 よのうみのたのみ志人を見るからに見えそきよきたのまるゝ哉

これら六件の格どもにそむきてハよく そのひて申しとくり。おのづからおもへるをしるべし

新千
我なくて君が七代のかずならぬふるさとの里[志]まつらしとぞおもふしらべ

此歌ハ古今八段の歌にもよるべき心あるべし。あなてよめる君がこゝろの中に思ひつゞけしかれども志のびかぬるしかるを思ひて我らが中ハよろしかるべきからおもひなし

○千載七（ハ）君ぞしる人をおもふ人の身よりおのれの心の風雅十九に志をおもひぬる所しかれども安からぬ心の住吉の事。これらの志ハいくたびもいへる所ぞ。玉葉十二（ハ）よしなき中ハいふべき事の心をさだめたる事ぞ。続千載十六（ハ）君がかたみのあかしのうらの思ひかぞへてもさだかならぬ心のさまをいへるべし。今の人の心あるべし。の志のどハいくいやしきがなすよしいへり。

○志も　これハ二のど古やをも先辞也。上の文字をたすけたる志もじハおほむね

古三
東やまかぜそやまだつもりくゆるもみぢばを[志も]ながてふきなく

同十三
ちりぬる[志も]おきまどはせる志らぎくの花（花をふくみそろの意）

同恋
なるが里にもなかなきてふ郎ふたゞこそ[志も]ほかるまさる

金三
今朝ぞ[志も]たに出るらん東路乃いそべの小松の志のきざゝき

なまつれ志もハいづかたもまちやすめてばなる
まゝ

古三
むかしへや今も恋しきほとゝぎすふるさとに[志も]鳴きてきつらん

同四
天の川紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋を[志も]まつ

拾十一
いまさらにしよみそぎの君人の名[志も]袖をぬらすらん

同十二
夢のごとねぐらよる[志も]君をえんくうしまゝまも定めなき世に

同十七
ころに[志も]なかなかなりける女郎花人の心のひさかたのきよふ

これらハ同じやうに先辞なるもいへどもうつせみのあるがうへにえりわくる事なりに知るべし。袖ぞよしをハ秋もおかなき中に志もしとしも。袖をえり出る心。秋もおぼつかなくてんなるべし

新古
春も本もいるに笑みて花の花松のこ[志も]そがてそめきん

是も同じ志もにて下に
知を添ふるハ先つてし

なのみ。萬葉にハしもといふや。また辞猶あまたしにあり。七の巻

古歌の例ども出せる也

拾
六

うきしも行し秋しも人のうへかゝるをバいとゞたゞやぞ哀かりける

これハしも二つあり。上なるハうそに無きしも。下なるハえり出つるしもなり

○拾遺ヲ十五剝れてし思ひし物をふたりのいひさむにしもあるぞなりきん。

此しもハ写し誤りし古本にしてもいへるぞ正しき。又風雅十六今しもたらず

まさる行くさま老せぬ松の夕暮ぞ山。此しもハいひくるし。今ハしもと

ていふべきなり

○さらに無きしも

とて戴りしも行き。時しも行きなどいへる。戴りこそ行き。寄りこそあれ。

とりふにほど。さるなみてその格にまよふ。法べり。万葉十八の長歌に。あてをし

も行やふさしみくひつぎにされてよめる光もしもしかくてき。

と法べり。又新古今にありこそ行きなどがふくほえて。これありしも行き

とひもと合くほどなり。又蜻蛉日記の詞によ思ふしもこそハ行きとさる

てもいへり。なにしもこそとさるらふ例をもの表その例にあまた挙けり。又

後拾
四

なみゑしおもふる妹べかりけるしも行きもしろめくも思ひ出るかな

此三の句ハ妻りてしも行きにや。ともいひしとも。かくのごくいふと又一つの格なし

玉葉
集

しもしもあまいそぎゆきて残されむとなる人をかれとまつ

哀れ新古今はて　春日　春日

これもさの後拾遺の歌と同じ格ぞ。人こそ行き思しもといふこゝろ。此歌新古

今ハ袖の句思しまれと行り。これハしも行きとて。老そひるそ用ひたる。

○風雅十三今しも行き人のなげきもかゝらじを

これハ例のむかしてぞまで玉葉風雅などハかゝるみだりなるをぞつねにおほかる

○しもぞ　三の巻ぞの部に出せり

○しもこそ　其の巻こその部に出せる也

古七 さくら花ちりかひくもれおい[らく]のこむといふなるみちまがふかに

拾十五 塩みてば入ぬるいその草なれや見[らく]すくなくこふ[らく]のおほき

此外此たぐひ万葉に多し。七の巻古今の部にも出せり

まく 附 ま

古十三 いたづらにゆきて八きぬる物ゆゑに見[まく]ほしさにいざなはれつゝ

同十七 おもふどちまとゐせる夜八から錦たゝ[まく]惜きものにぞありける

同十八 いざこゝにわが世はへなん菅原や伏見の里のあれ[まく]もをし

同十七 わたの原よせくる浪のしば〳〵も見[まく]のほしき玉津島かも

拾十六 宮こうすみかたの山につめるからなづなあづさ八[まく]のほしき君かな

此うたのうへの句八附たり。第二にのるしを添てといへり。すべて万葉に八見ざる事なれ共是ハ七の巻古今の部にも出せり。天王寺の歌に八けまくもかしこそぞおもふ[ま]じ。これハみがきとあり

又件のまく此男きてまたいへり。見まくほしき事のしるしなるべし。

拾遺十六の家にハ見まくほしきとよめり。

元真集 里よりきでてまけもあらねばいざなはれ我ものべつゝへ[ま]をし

これを下へつゞくる時ハくの語をまにかへてよみ给ふ事

きく　附　きし　きき

古十八　常はさきくにあきぬおく山乃木葉にふるゆきやきるまし

同十九　まちわびれどもなぞハよきくかひやのみづにてかとどあしきくもなし

後三　さりともしきてし涙衣の涙をはるる月日のきしきくもなし

太和撰　ながきくをたのみけるかなよの中に生まれしなきぞのかげをかけて

あき万葉に八るひるきしこひしきくかしきくやをききくいきくかへしきく　ひるまきく袖くきくうれしきくつらきくなどおなし

又　きし　語きし　さむきき　つるききなどの　きし　きき八　大のきくと同

ど辞たちてかへるてきと聞ゆることなし。

かし

○かし八切まつる辞の下に添ふることなし。より上にぞのや何などの辞あらば。又ち格の結び辞にて切るる下にもおくすなり。

古十　たれこそよりそまれて玉の緒よしまぬやてきかんをまちつせるん。かし

後十六　忘らし時哀を忘しみきぬべくなみのびをとりにちやとききよ。かし

拾十九　いもとがさなふらハ待しきつつかからバ恨をかぞふらにきえても見よ。かし

後拾十五　あぢむきば月かくむきぬあさきとるが此世はおどもかぞくりぞ。かし

同　ゆくばてをつふかもあらめちくきでのつうとバかりハおとづれよ。かし

同十七　きらえとつへぞそれ玉緒の寄むりつつやおしやと人のとへ。かし

玄浦集　松きのと引てかへらバうそれ花たりふみてろ乃あるらん。かし

後拾十四　おもひやは恋しいのちぞきえしぬべき人の禁にさふかなよ。かし君

同三　みなかみもいかならんかうとうじ。かし彼もなごしのみそぎしつれバ

同十六　苦しくて昨日やけふもいかならん秋の夜もすがら。かし枝のとばかりさなぶふ

千十七　とふとても恋の身ぞ。かしと思ふもしらずあらし茱将いかならん

新一　とゑこ。かし梅さかり猶るよが宿をうらにも人をまちにてそよれ

いせ物語　恋しくばきてもみえよ。かしちはやぶる神のいさむるみちならなくに

大和物語　ちてしまきみなすみよし。かし夢乃なくまりのとや思ひいづべき

○元輔集に身はなき人は恋かの見てもおもひつつなくぞみすともぬかし光八上よぞとひへまバ。ぬるかしというべき所。ぬかしといふハ。その詞びあるがゆ

後拾十七　とへかしなにくよともいかならじ恋の身をまつしとふ禁みやかくると

新八　とへかしなかりしく夜のちからもまふなるぞのかれ秋の旅ざ光を

かくのごとく下へ分を添てもいへり。又浜松中納言物語の詞子ハ。かしやとやを添ていへることも見ゆ

御学ハそのかげみえよかし。見えかしなどいへる皆ひのおもきにならひて。かしハいづれも願ふ言の辞ぞとのこんのるハ誤りてとし。たがひにいへる言ども此中にも願ふことにあらざるも多きを思ふべし。又文章などにハ詩ふ些あらぞれなき中にきかしぞかし見かしつかし分かしらんかしきんかしなどもいへるなりや。